賀茂岩倉遺跡（雲南市加茂町）

前方は賀茂岩倉遺跡ガイダンス/手前に銅鐸のレプリカが置かれている

島根県雲南市加茂町岩倉の農道工事現場より、弥生時代中期から後期と思われる大量の銅鐸が出土し、一カ所の出土としてはこれまで全国最多の39個が確認された/出土した銅鐸は弥生時代中期頃に製作された古い形式のものと、新しい形式のものとがある/銅鐸の多くは、大きなものの中に小さなものを入れた、入れ子の状態で発見された/銅鐸内部に詰まっていた土砂の分析結果から、銅鐸を埋める前に、人為的に中に砂を押し込んだ可能性があることが確認されていると云う　（クリックしてビデオを見る）

第26回しまね景観賞
優秀賞
平成30年度

公共建築物部門

加茂岩倉遺跡ガイダンス

雲南市加茂町岩倉

■事業主体　雲南市

■設 計 者　株式会社 アーキテクトファイブ

■概　　要　一遺跡の出土として全国最多の39個の銅鐸が出土した加茂岩倉遺跡を見学される方々に、周辺の豊かな自然を楽しみながら遺跡や銅鐸の理解を深めていただくための総合案内所。

竣工年月：平成15年3月
構　　造：鉄筋コンクリート造 地上1階、地下1階
建築面積：199.50㎡
延床面積：197.68㎡

銅鐸の出土した遺跡の山肌を、発見された当時の埋蔵状況がわかるように屋外展示してあるのが加茂岩倉遺跡の特徴である。この遺跡から半円周の遊歩道でつながっているのが、ガイダンス役を果たす当該建築物である。

外観は木目の際立つ細幅の型枠を水平方向に渡して打設したコンクリート部分と、外壁木材との調和が図られている。大胆なガラス張りの内側にベンチを設けた半屋内空間があり、座って遺跡の方角を眺めた光景と、遺跡の真下の坂道を登りながら建築物を見上げた光景との、見る・見られるの反転の妙を味わうことができる。

遺跡からガイダンスまでは、車の乗り入れを禁止しており、電柱を建築物の裏側に設置し、屋外設備機器の前には植物を目隠しに植え、歩行者の視線を意識した景観に対する配慮のみられる造りである。

とりわけ夕方に、周囲の自然環境と馴染んで建築物が溶け込んで見えるといい、四季折々の新緑・紅葉・雪肌に沿う、風景との一体化が、時折見られる主張の強い公共建築物とは異なる静謐（せいひつ）さを醸し出している。

〈審査委員　藤居由香〉

ガイダンスから遺跡の方角を見たところ　（クリックしてビデオを見る）

ここが遺跡発見現場

発見状況が再現されている　　（クリックしてビデオを見る）

加茂岩倉遺跡発見の様子

平成8年10月14日、農道の法面工事のためパワーショベルで山の斜面を削っていたところ、大量の銅鐸の出土により加茂岩倉遺跡は発見された。

遺跡は狭く細長い谷の最奥部手前の丘陵に位置し、南向きの丘陵斜面中腹にあたる標高138m、谷底からは18mと見上げるような高い場所に39個の銅鐸は埋納されていた。一カ所から出土した銅鐸の数は日本最多である。

銅鐸埋納坑と銅鐸の出土状況

銅鐸埋納坑の一部と埋納坑内に入れ子状態に埋納された2組4個の銅鐸［29号（30号）、31号（39号）］と、銅鐸の圧痕3カ所が確認された。

※（　）内は入れ子内の銅鐸

銅鐸の埋納状況

中央の2個［29号・31号］が原位置のもの。左の2個の銅鐸は2号圧痕・3号圧痕をもとに、同サイズの銅鐸を置いたもの。右の銅鐸［5号］は1号圧痕をもとに出土銅鐸が特定された。

銅鐸の配列復元の一案

39個の出土銅鐸は、ほとんどが入れ子状態であったと考えられ、中型銅鐸20個が接した状態で整然と並んでいたと想定すると、約2×1mの畳1枚程度の小さな埋納坑が推定された。

発見までの経緯

この丘陵斜面の掘削は10月10日（木）に着手し、11日（金）にはパワーショベルを使って上から5mの最上段の法面ステップを完成させ、2段目の法面作業を始めた。掘削した土は谷側の斜面下へ落としていた。翌土、日曜日は作業を休み、14日（月）の朝、斜面下の藤土の中にプラスチックのバケツの口のようなものがあると気づいたが、あまり気にとめず掘削作業に入った。そして、10時頃パワーショベルのバケットの中に銅鐸が入っているのに気づいて作業を中止、作業をしていた高台から斜面下を覗くと下の水田や道路に多数の銅鐸が転げ落ちていたという。それらを水田の畦に並べ置き、バケットの中の銅鐸は取り出して工事現場の北東隅に寄せ置き、会社に連絡を取った。銅鐸発見の一報は請負業者を通じて発注元の農林課へ、正午前に教育委員会へ連絡が入った。（発見者の小田竜蔵さんからの聞き取りによる）

銅鐸が出土した丘陵

銅鐸発見時の様子

重機により掘削された埋納坑

埋納状態の銅鐸

集積されていた銅鐸

水田のあぜに並べられた銅鐸

専門家かけつける

一般公開に訪れた見学者

銅鐸埋納坑と銅鐸の出土状況

銅鐸埋納坑の一部と埋納坑内に入れ子状態に埋納された２組４個の銅鐸［２９号（３０号）、３１号（３９号）］と、銅鐸の圧痕３カ所が確認された。

※（　）内は入れ子内の銅鐸

銅鐸の埋納状況

中央の２個［２９号・３１号］が原位置のもの。左の２個の銅鐸は２号圧痕・３号圧痕をもとに、同サイズの銅鐸を置いたもの。右の銅鐸［５号］は１号圧痕をもとに出土銅鐸が特定された。

銅鐸の配列復元の一案

３９個の出土銅鐸は、ほとんどが入れ子状態であったと考えられ、中型銅鐸２０個が接した状態で整然と並んでいたと想定すると、約２×１ｍの畳１枚程度の小さな埋納坑が推定された。

銅鐸発見時の様子

重機により掘削された埋納坑

埋納状態の銅鐸

集積されていた銅鐸

水田のあぜに
並べられた銅鐸

専門家
かけつける

一般公開に訪れた見学者

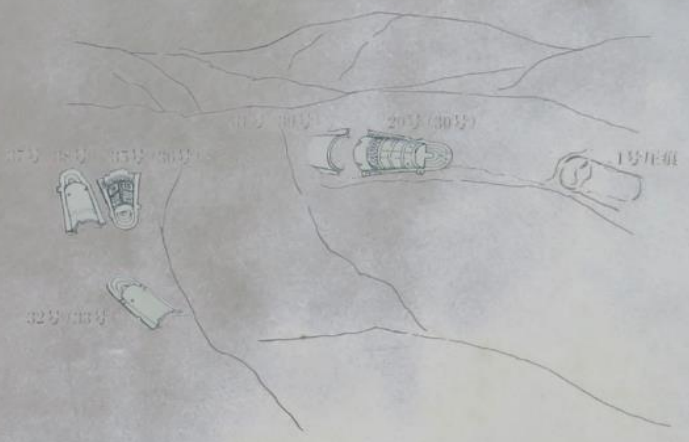
埋納状態の銅鐸

埋納状態の銅鐸

工事中の発見であったが、幸いに弥生時代に埋められたままの姿の銅鐸が遺跡に残されていた。

半壊していた埋納坑内には、裾を向かい合わせにした入れ子状態の2組4個の銅鐸［右が29号（30号）、31号（39号）］が残され、その右側には銅鐸の痕跡（1号圧痕）が確認された。

また、パワーショベルのバケットによってできた穴の南側には、二次的に堆積した攪乱土の中から入れ子状態の3組6個の銅鐸［32号（33号）、35号（36号）、37号（38号）］が出土した。



※（　）内は入れ子内の銅鐸

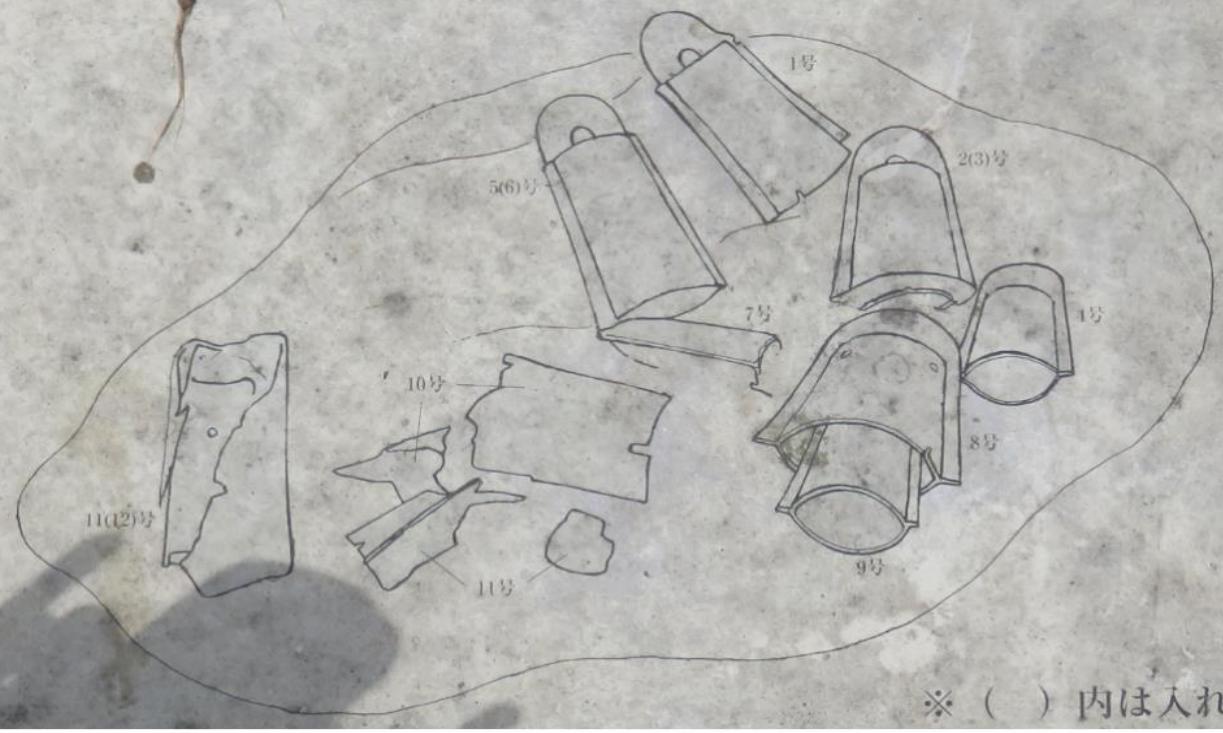
銅鐸のレプリカがそれらしく置かれている

こんな塩梅

集積されていた銅鐸

集積されていた銅鐸

パワーショベルのバケットの中に、土砂と一緒に入っていて発見された。銅鐸［１号～１２号］は、現場の北東隅に寄せ集めて置かれていた。



※（　）内は入れ子内の銅鐸

土坑

劣化していて良く読めない

参考ホームページ

https://www.city.unnan.shimane.jp/unnan/kankou/spot/iseki/musium02.html

https://kamo-iwakura.amebaownd.com/pages/1404761/page_201711071032

https://ja.wikipedia.org/wiki/加茂岩倉遺跡

宍道湖
431
一畑電車北松江線
9
山陰本線
一畑電車大社線
E9
出雲市
9
54
木次線
E9
184
雲南市